昭和46年 8 月 8 日発行通巻22号(毎日曜日発行)　昭和46年 2 月 5 日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

8/8

220円

22

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《１～64号の内容は表３参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目次

世界動物百科　第22号

カラーページ

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について
本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。
朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

8月4日発売

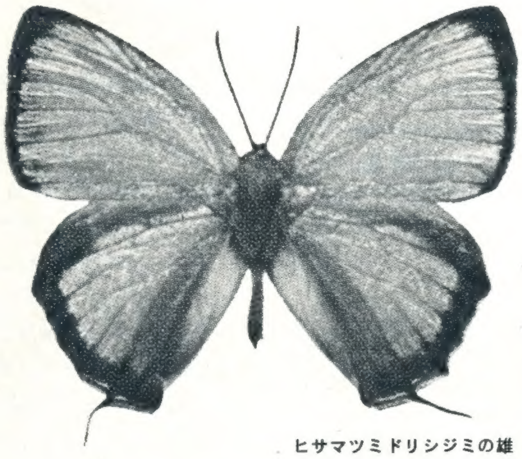


世界動物百科
23号　8／15

カラーページ

昆虫採集は是か非か

〝禁欲主義〟から〝虫屋共闘〟まで



ヒサマツミドリシジミの雄

週刊「少年サンデー」に6月13日号から連載された『旅立て！　ひらりん』（山上たつひこ作）というマンガがあった。

虫好きの少年が，「身におぼえのない〝殺虫罪〟に問われて，ふしぎな国へ連行される夢と冒険の大ロマン」がふれこみだった。

ある夜，動物たちの法廷に引きだされた主人公の少年は，爬虫（はちゅう）類の裁判官からこんな罪状を読みあげられる。

「おまえは幼いころより，近くの野や山に出かけては，平和に暮らしている昆虫（こんちゅう）類をつぎつぎと捕え，毒ガスのじゅうまんしたビンに押し込め，あるいは巨大な針でもって，くし刺しにするなどして虐殺し，極悪非道の限りをつくした。

また，一部の昆虫は，家にもちかえり，生態を観察するなどと称し，彼らの寿命のつきるまでその自由をそくばくした」

被告席に立たされた主人公は，髪を振り乱して抗弁する。

「たしかにぼくは，小さいころから虫が好きで，いろんな虫を採集してまわったさ。でも，自分の楽しみのために虫を殺したことは，一度もないぜ。ぼくは虫の世界について，ひとつでも多くのことを知りたかっただけさ！」

ストーリーはその後，意外な進展をみるのだが，この両者の言い分は，いま昆虫マニアと自然保護を唱える人たちのあいだで戦わされている「昆虫採集は是か非か」論争の核心をついているのだ。少年マンガの世界に，〝殺虫罪〟という考えが登場したことも注目に値する。

いまでも，夏休みの宿題といえば，すぐ昆虫採集を思い浮かべる父母が多い。だが，もう数年前から，昆虫採集を奨励する小，中学校は少なくなった。

秋の新学期に，虫の標本を持ってくる生徒があっても，先生はごく冷淡に扱うのだそうである。うかつにほめると，他の生徒にも〝殺虫罪〟をそそのかすことになりかねないから……。

「自然への関心を呼びさまし，子どもに科学する心を植えつけるもの」として，つい10年前まで奨励されてきた昆虫採集が，経済開発や公害のために昆虫類が減ったことから，「殺戮本能をかきたてるだけのもの」と，きめつけられることになったのである。教科書からも，虫や植物を採集するさし絵は消えた。

〝虫屋〟のなかの造反

そんなわけで，フィクションではなく現実の世界で〝殺虫罪〟に問われることになったのは，子どもではなく，おとなの昆虫マニアだった。

昆虫採集を趣味にしている〝虫屋〟の数は，全国で5000人を下らない。幼いころから病みつきになった大学生や高校生が多いが，中年になってから始めた社会人もいる。

この虫屋たちにとって，無関心ではいられない事件が，ことしの3月に起こった。

「ええ，〝ヒサマツ事件〟以来，虫屋は2つに割れて，大騒動なんですよ」

とぶちまけるのは，月刊誌「昆虫と自然」の佐久間信編集長。この雑誌は創刊から6年になるが，自然保護の必要を説き，昆虫の乱獲をいましめる立場をとってきた。

読者欄では「昆虫採集の禁止」や「標本の私有禁止」など，昆虫マニアには致命的とも思えるテーマさえ論じられた。

ところが，この〝禁欲主義〟に満足しない勢力があって，4人の大学生がライバル誌を出すことになった。「虫屋の欲する雑誌を！」なる主張を掲げて，ことしの3月にうぶ声を上げた「月刊むし」がそれである。

「なんといっても，アマチュア虫屋の最高の楽しみは，虫を採ることである。私たちは，虫屋の喜びである〝虫を採る楽しみ〟を追求していきたいと思う」

と，発刊の辞も威勢がよかった。お説教の代わりに，珍しい虫の穴場をどんどん紹介しようというのである。創刊号の売物は『ヒサマツミドリシジミの採卵』特集だった。これが〝ヒサマツ事件〟の発端となる。

〝幻の卵〟にどっと殺到

日本には約230種のチョウがいる。戦後の研究で，1種をのぞくすべての生活史が解明され，最後に残ったのがヒサマツミドリシジミだった。4センチ余りの小型種だが，雄は美しい緑色に輝く。

採集記録も少なく，親チョウがどんな木に卵を生み，幼虫がどんな経過で育つかなど，生活史がわからないため〝幻のチョウ〟と呼ばれてきた。日本鱗翅学会がこのチョウの生活史解明に，懸賞金をかけたほどのものである。

ところが2年前，京都の主原憲司さんが鈴鹿山中のアカガシから，偶然ヒサマツミドリシジミの卵を1つ発見した。これがきっかけとなって去年の秋，東京の藤岡和夫さんによって，ウラジロガシの頂上の芽から〝幻の卵〟が多数発見されたのである。

「月刊むし」の創刊号には，藤岡さんが『ヒサマツミドリ物語』を執筆し，同誌の編集者である小岩屋敏さんが『ヒサマツミドリの卵を求めて』と題する採集紀行を書いた。

物議をかもしたのは，小岩屋さんの記事である。昨年11月，藤岡，小岩屋さんら8人が，滋賀県・愛知川上流へ，ヒサマツミドリの卵を求めて〝総攻撃〟をかけたところから記事は始まる。

「川っぷちに，根元の直径1メートル，高さ15メートルはあろうかという，ウラジロガシの大木があった。O氏は一片の同情もためらいもみせず私に命令した。登れ！　横枝のつけ根に到着して深呼吸し，そろりそろりと枝先に進む。はるか下方のブッシュでF氏やO氏が，早く枝をよこせー！　さっさと切れー！　などと騒いでいる」

「悪戦ののち，直径10センチばかりの太い横枝を切り落とす。やがて待望の一声。あったぞ！　太枝を5,6本切り落とし，全員で100卵余採って昼メシにする」

直径が0.7ミリくらいしかない〝幻の卵〟が，いっぱい見つかるクライマックスなのだが，興奮した筆者は，大木をまるぼうずにしてしまうことの是非を忘れたらしい。ウラジロガシのてっぺん近い芽に生みつけられた卵を採るには，根もとから切り倒すか，枝を切り落とすしか



『旅立て！　ひらりん』山上たつひこ作（少年サンデー）より

ないのである。この記事は〝自然破壊〟の姿をあけすけに示した。

念入りなことに「ヒサマツは君にも採れる」という見出しをつけて，静岡県安倍川上流，滋賀県比良山の東麓と西麓，京都府北山別所，宮崎県高千穂峰山麓などでも採卵できたと付記している。

虫屋の採集意欲をそそるムードがいっぱいなのだ。事実，この雑誌が出る以前から，情報を伝え聞いた昆虫マニアが，どっと産地に殺到して〝幻の卵〟を追い求めた。

たちまち絶滅の危機に

一方，昆虫マニアが各地のウラジロガシを切り倒している，という情報を得た日本自然保護協会と日本野鳥の会の会員たちは，3月はじめ静岡県安倍川流域へ実態調査に乗りこんだ。

「いや，ひどいものでした」

と，その惨状に憤慨するのは日本野鳥の会の市田則孝さん。

「細い木はオノでたたき切り，樹齢90年という大木は電気ノコギリで倒されている。おそらく自動車で乗りつけて，バッテリーを電源にしたんでしょう。静岡県の梅が島地区では150メートルにわたって，20本以上のウラジロガシが倒されていた。私有林だから，まさしく盗伐行為ですよ。こんな無法者がいるかぎり，ヒサマツミドリシジミを天然記念物に指定して，採集を禁止するしか方法はないと思います」

梅が島地区一帯には，去年の11月からことしの3月にかけて，延べ50人からの採集マニアが繰りこみ，ヒサマツミドリシジミの卵を4000個以上持ち去ったとみられている。親チョウが好んで産卵する枝がなくなったのだから，この地域の珍チョウは，まさに絶滅のピンチに見舞われたわけである。



静岡県梅が島地区のウラジロガシ盗伐現場

〝幻のチョウ〟として昆虫マニアが，何年も追いつづけたヒサマツミドリシジミの卵が発見されたのだから，有頂点にもなるだろう。しかし，なぜ根こそぎ採りつくさねばならないのか。

一説だと，昆虫業者の介在に問題があるという。最近，幼いころの虫集めを思いだし，ポンと札束を投げだして，

「珍しいチョウを30万円がとこ持ってこい」

と，昆虫業者に注文し，応接間に飾って喜んでいる社長や重役がふえたという。ヒサマツミドリシジミには，雌雄1対で1万円の値がつくのである。

それはともかく，日本自然保護協会と日本野鳥の会による現地調査の結果は，3月初旬の新聞に報道されて，大きな反響を呼んだ。地元の静岡昆虫同好会をはじめ，抗議声明を出す同好会が続出した。

「昆虫と自然」誌にも批判の投書が集まった。

昆虫を追いはらうのはだれか

非難の矢面に立たされた「月刊むし」では，その第4号にこんな謹告を載せている。

「本誌創刊号のヒサマツ採集記が，一部に無用の誤解を招き，乱獲をあおるかの如き印象を与えたことにつきまして，慎んで遺憾の意を表します」

例の採集紀行を書いた小岩屋さんは，東大農学部を「思うところあって」中退した24歳の青年である。600人の会員を誇る京浜昆虫同好会の一員で，同会の委員長をしていた昨年5月，東京・清水谷公園で開かれた「自然を守る市民集会」に，20人の〝同志〟とともに乗りこんだ。

京浜安保共闘ならぬ京浜「虫屋共闘」を名のり，黒いヘルメットに身を固めた一行の姿は，異色の存在として人目をひいた。小岩屋さんは，自然保護についてこう語る。

「自然界にすむ昆虫は，野鳥などにくらべると，繁殖力が大きいんです。われわれ虫屋がネットでとったくらいでは，ある種類が絶滅するなどということはない。昆虫に致命的な影響を与えているのは，林業開発であり，観光開発であり，さらにダム工事や農薬なんです。こういう大がかりな自然破壊こそ問題だと思う」

東京農工大の日高敏隆教授も，この言い分を全面的には否定しない。

「東京にトンボがいなくなったのは，子どもがとりすぎたからではない。東京という都会が，トンボのすめない環境になったからです。チョウが激減したのはどこかというと，雑木を切ってスギを植林したとこなんです」

「こんな例もある。昆虫の宝庫といわれた東京・高尾山駅のそばに，虫の多い小山があった。虫屋たちはチョウは採っても，食草はとらずにだいじにしていた。ところが市の計画で，バーッと木を切り公園にしてしまった。ギフチョウなんか全滅ですよ」

「こんな経験をした虫屋のなかには，われわれがだいじにしても，開発でやられてしまう。敵の手で殺されるよりは，自分の手でせめて標本にしておこう，とヤケッパチになる者もいる」

「〝月刊むし〟の連中は，虫屋共闘だか虫獲派だか知らんが，自然保護を根本的に問い直そうと，問題提起した意義は認めます。しかし，私有林を荒らしたのは，弁護の余地もない大失点でした」

というのである。

つい先ごろまで虫は無尽蔵と考えられてきた。虫屋たちも，ギフチョウ，オオムラサキ，チョウセンアカシジミなどをのぞいて，虫類の保護に積極的な行動をしてこなかったフシがある。こんどの〝ヒサマツ事件〟にしても，自然保護運動の先輩である野鳥の会あたりから，警鐘を乱打されている状態なのだ。昆虫保護の問題は，やっと緒についたばかりである。

ふたりのバッファロー・ビル

アメリカバイソンの悲劇　5

藤原英司

アメリカバイソンの話になると，必ずといっていいくらい登場する名物男がいる。通称バッファロー・ビルといわれる男で，本名をウイリアム・フレデリック・コディといった。この男は，もともと鉄道会社に雇われたハンターだった。かれの役目は，鉄道工夫のためにバイソンを殺して，食料源を確保することだった。鉄道はかれに500ドルの給料を払った。これは，インディアンとの戦闘を考慮にいれたものだったが，当時としては非常な高給だった。

賞金かけた大殺戮ショー

ところで，そのころウォリス砦にカムストック班長という射撃の名手がいた。部下の兵隊たちは，その班長のことをバッファロー・ビルと呼んで自慢にしていた。ところがいつのまにか，鉄道会社の青二才が同じ称号をたてまつられ，日に日に有名になりだした。兵隊たちはすっかり頭にきた。青二才の給料が，500ドルという高給なのもしゃくの種だ。そして，ついにこの2人に腕だめしをやらせ，黒白をつけようということになった。どうせ班長の勝ちにきまっていると考えたから，兵隊たちは賭金を500ドルにして，青二才から1月分の給料をふんだくることにした。この話を鉄道へもちこむと，鉄道会社はそいつはいけると大喜びした。そして，さっそく会社は大々的に宣伝して，周遊券を売りまくった。2人のビルが腕を競う場所は，シェリダンの東30キロと決まり，当日は大ぜいの観衆が現場へ押しかけた。レフェリーが2人決められ，コディとカムストックに1人ずつ付き添って，倒したバイソンの数をかぞえることになった。群れが見つかるまで，2人は並んでウマを進めた。やがて群れが現われると，2人は〝始め〟の声を合図に左右へ別れた。

コディは群れに駆けつけると，まずリーダーを倒した。それから，逃げる群れを巧みにぐるぐる回りさせ，次々と獲物を殺した。カムストックは，いつもコディのおこぼれを倒す程度で，あまりふるわなかった。このときコディは38頭，カムストックが23頭を倒した。

やがて，第2の群れが現われた。2人はさっそく追跡に移り，コディが18頭，カムストックが14頭を射殺した。まもなく第3の群れが現われた。かなりの大群である。コディは愛馬の背から，鞍をひきはずした。そして裸ウマにとびのり，バイソンの群れに突っこむと，狂ったように殺しまくった。カムストックも殺戮の鬼と化した。そして，コディがなんと69頭，カムストックが57頭ものバイソンを射殺した。しかもコディはこのとき，最後の1頭を群衆のほうへ追いたて，女たちが金切り声をあげる面前で倒すという，離れわざをやって観衆をわかせた。

500ドルの賞金と名声を勝ちとった，その日のコディの得意そうなさまは，今日でも想像にかたくない。だが，この日平原に散乱した，219頭のバイソンの累累たる死骸のことを考え，また今日，保護区にやっと命脈を保つにすぎないアメリカバイソンの運命を思うとき，わたしたちは100年前の人間の暴挙に，暗い怒りを覚えるのである。

バッファロー・ビルという男は，結局

１年半の間に，4280頭にのぼるバイソンを殺戮した。だが，このプロ・ハンターの記録も，まだ最高ではない。〝最後の西部の保安官〟として，開拓史上に勇名をとどめるビリー・ティルマンは，７か月たらずの間に，3300頭のバイソンを殺した。人間世界の悪を取り締った正義漢が，人類共有の財産を破壊することにおいて，記録的な犯罪者であったとは，まことに皮肉な歴史の審判というほかない。

インディアンの物々交換

だが，この時期のバイソン減少の原因を，白人だけに帰すわけにはいかない。インディアン自身もまたいつのまにか，みずから墓穴を掘るような，バイソンの大量殺戮に加担していた。むろん自分たちの需要を満たすための狩りもあったが，そのほかに，祖先の時代とはまったく異なる別の目的が，かれらのバイソン狩りにはいりこんできていた。つまり，かれらは白人から銃や弾薬を手にいれるため，バイソンの皮を通貨がわりに使うようになったのである。

いまやバイソンは，かれらにとって日用の糧ではなく，足のはえた金貨と化した。そして，できるだけ大量にその金貨を手にいれることによって，少しでも多くの武器を獲得しようとした。かれらは自分たちの戦力を増強するために，なるべく多くの武器がほしかった。自分たちを白人の脅威から守るには，自衛力を強化する以外，道がなかった。だが，それにはバイソンを狩らなくてはならない。そしてそのために，かえってみずから糧道を絶ち，自滅の道をたどる運命を負ったのである。しかも，それは武器がふえればふえるだけ，バイソンの減少に拍車をかけることになり，同時に，かれらの自滅する速度を早める結果になった。

狩り倒したバイソンとひきかえに，インディアンたちが白人から手にいれたものは，銃器だけではなかった。ほかにもさまざまの物品が交換された。そして，なかでもかれらがもっとも好んだのは，〝気違い水〟と呼ばれたウイスキーである。

1832年の春，当時の画家ジョージ・キャトリンは，テートン川の近くで，ウイスキーを買いにきたインディアンと白人の取引きを目撃した。ある日，川の対岸にバイソンの大群が現われたが，やがて昼ごろになると，今度は川のこちら側に，インディアンの大部隊が出現した。それはスー族で，みんなウマに乗り，総勢500～600人はいた。かれらはウマに乗ったまま川を押し渡っていき，バイソンの群れのなかへはいっていった。

2,3時間もすると，その連中が帰ってきた。かれらは手に手に，切りとったばかりのバイソンの舌を持ってきて，それを白人たちの前へ積みあげた。ウイスキーと交換したいというのである。舌の数は1400枚もあった。つまり1400頭のバイソンを，2,3時間で殺したのである。しかも，持ってきたのは舌だけだった。皮も肉もまったくなかった。バイソンは舌を抜かれただけで，あとは全然利用されず，すべて腐るにまかされたのである。そしてこのとき，インディアンたちが持ち帰ったウィスキーは，わずか10リットルほどにすぎなかった。

真犯人はだれか

南部の群れが姿を消したあと，北部での白人の狩りが激化した。そして，１万頭の群れが，わずか2,3日で，白人の手によって全滅したことさえあった。そのとき，白人たちは各水場に人員を配置し，のどがかわいて水を飲みにやってくるバイソンを，次々射殺しつづけたのだった。

このように，白人とインディアンはたがいに争いながらも，大局的には共同して，バイソンを絶滅の淵へ追いこんでいった。いわば，白人がバイソンに鉄槌を下し，インディアンがそのよろめくバイソンの足を払ったともいえる。だが，インディアンは結局，自分が足払いをかけた獲物に押しつぶされて，ともにほろぶ運命にあった。その点で白人の計算は，確かに誤ってはいなかった。だが，その



え　清水　勝

後約１世紀を経た今日，われわれの目から見ると，白人たちは当時，すでに人類を代表して，みずから墓穴を掘り始めていたといえるのである。

その点で，バイソンとともにほろびの道を急いだインディアンと，当時勝利を謳歌した白人とのあいだには，愚かさの程度において，大差がなかったといいうるだろう。むしろ，自然と調和して生きていたインディアンを，バイソンとともに惨憺たる状態に追いこみ，史上いまだかつてどこにも例がないくらい，大量の野生動物虐殺を遂行したことにおいて，当時の白人のほうが，インディアンよりいっそう愚かであり，人類全体に対して，自然全体に対して，あるいは神に対して，よりいっそう犯罪的であったといえるかもしれない。■

虫好きのある人類学者は，

「人間の数がふえるかぎり，どんな自然保護も焼け石に水。現在いる生物を標本にして，博物館に保存するほかはない」

と悲観論を述べている。だが，あきらめてしまう前に，昆虫も植物も哺乳（ほにゅう）類も鳥類も，全部ふくめた総合的な自然保護の方法を検討してみる価値はあろう。もちろん，経済開発や観光開発で，人間が自然を破壊する限度についても，検討されねばなるまい。

昆虫採集の心得

ところで，子どもの世界はいよいよ夏休みにはいった。小，中学校で昆虫採集を奨励しなくなったことは最初にふれたが，子どもたちがどうしても採集をしたがる場合，親はどう考えたらいいのだろう。

南山大学の阿江茂教授（昆虫学）は，

「昆虫を研究するうえで，採集はどうしても必要です。将来，生物学の分野に進もうとする小，中学生には，昆虫採集をさせたほうがよいと思う」

という意見である。

これに対して東京教育大雑司ヶ谷分校の青柳昌宏先生は，絶対反対を唱える。

「わたしもかつて熱心な昆虫少年でした。珍しいチョウをネットに入れると，狩猟の喜びにおののいたものです。だが，いざ胸を押えて殺す段になると，ためらいを感じました。少年のこの気持をたいせつにしたいと思います。生物教育に名を借りた昆虫採集は，殺しのテクニックを教える以外の何ものでもありません」

「昆虫マニアは，虫とつきあうには採ることが必要だというが，自然の生きた虫を観察させるだけで，子どもたちはちゃんと名まえも覚えるものです。10数年の経験で，この点には確信があります」

最後に，東京・吉祥寺三中の須田孫七先生による「昆虫採集べからず集」を，参考までにご紹介しておこう。

①目的なしに採集するべからず。
②採集地や年月日などの記録つけをさぼるべからず。
③遠方や秘境だけが採集地だと思うべからず。
④採集数を競って乱獲するべからず。
⑤卵，幼虫，食草を無計画にとりすぎるべからず。
⑥産地の環境を荒らすべからず。
⑦飼育の際は，観察記録をおこたらず，途中で投げだすべからず。■

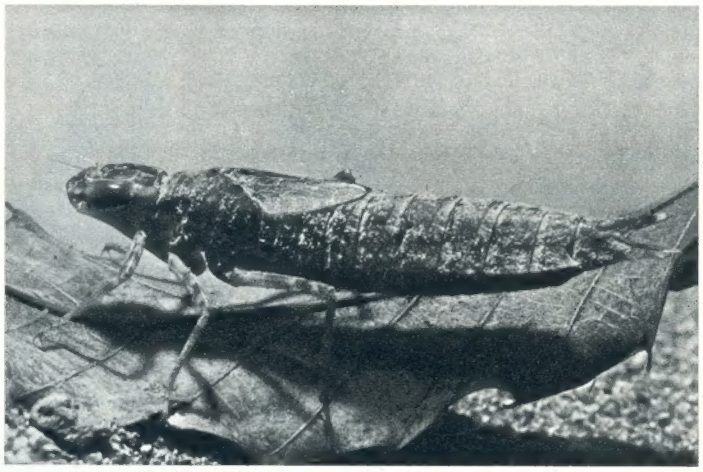
（本誌編集部・上田記者）

もうひとつの世界

17

グループ・5プラス1

〝てれすこ〟





〝外見が違うものは，違う名で呼ぶ〟という原理がある。このヤゴ（下）とギンヤンマ（右）とは，外見も名まえも違うが，同じ動物である（撮影　浜野栄次）

落語に「てれすこ」という噺がある。知らない人のために簡単に紹介しておこう。

むかし，海岸で見たこともない魚がとれた。漁師たちがだれに聞いても名まえがわからない。そこで役人が辻々に高札を立てて，「見なれぬ魚がとれたが，名を知っているものは申し出よ，金百両をとらせる」と触れを出した。

まもなく「わたしが存じております」とひとりの男が出頭した。魚を見せると，「ああ，これは〝てれすこ〟と申します」という。男はでたらめをいったわけだが，だれもほんとうの名まえを知らないので，変だなと思っても「うそを申すな」ということができない。「さようか」というわけで，百両とられてしまう。

だが，どうもおかしい。役人も考えて，魚を干物にしてからもう一度高札を立てて，見なれぬ魚が……とやる。案の定，同じ男がやってきたので，干物を見せると，「ああ，これは〝すてれんきょう〟と申します」「これはそのほうが，先日〝てれすこ〟と申した魚を干したものじゃ。上をいつわる不届きなやつ」というわけで牢屋に入れられて，裁きの結果，打首ということになったが，「いまわのきわに，何か申し残すことはないか」「へえ，子どもが大きくなっても，イカの干したのをスルメといわせるな，と女房に伝えてくださいまし」，で無実になるという噺である。

たいしておもしろい噺ではないが，動物学としてはおもしろい問題をふくんでいる。この噺を，動物学の側からながめてみよう。

知らない動物を見たとき，わたしたちはまず最初に，これはなんという名まえの動物なんだろうかと考える。そして，図鑑を調べたり，人にたずねたりし，名まえがわかるとなんとなく安心する。どこかで聞いたことのある名まえだったら，ああ，これがあのモグラなのか，と思うし，一度も聞いたことのない名まえだったら，フーン，これはヒミズというのか，と思う。

ところで，知らない動物といい，見たこともない魚というが，それはどういう意味だろう。それはいうまでもなく，わたしたちがすでに見たことがある魚，すでに名まえを知っている動物のどれとも，外見が違う，ということである。

わたしたちは生まれてこのかた，何百匹，何千匹もの動物を見て育ってきている。その経験からして，わたしたちは身のまわりの動物の世界――〝もうひとつの世界〟には，おたがいに外見の違うものがいくつもある，ということを知っている。そして，そのような外見の違うものをそれぞれ違う名まえで呼んできた。ふつうには，それらにすでにだれかが名まえをつけている。だから，世間ではこれをなんと呼んでいるのかを知る，ということになる。以前の子どもたちは，それを年上の子や仲間から教わって覚えたものである。どうも今ではそうではないらしいし，自分の経験から，おたがいに外見の違うものがいくつもあることを知るのでもないらしい。だが，その手続きは問題ではない。

ここには，もうひとつの世界にはおたがいに外見の違ういくつかの（何種類かの）ものがあって，おたがいに区別できる，という認識があり，したがって，外見の違うものは違う名で呼ぶ，という原理があることをいえば足りる。この原理は，外見が同じものは同じ名で呼ぶ，というのではない。

この原理を貫くかぎりでは，イカとスルメは外見が違うのだから，違う名で呼んでも少しもおかしくない。〝てれすこ〟と〝すてれんきょう〟だって同様である。それがなぜおかしいのだろう。それはもちろん，1匹の同じ動物は同じものなんだから，外見が変わったところで別の動物になったのではない，と思うからである。

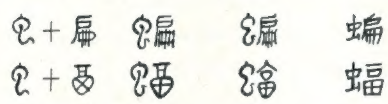
実は，ここで原理のすりかえがある。〝外見が違うものは違う名で呼ぶ〟という原理に対して，〝違う動物は違う名で呼ぶ〟という原理が新しく登場している。つまり，もうひとつの世界には，外見の違うものが幾「種類」もあるのだが，外見の違うものが，違う動物ではないのである。したがって，動物の名まえには第1の原理によるものと，第2の原理によるものとがあって区別できない。違う動物は，外見が違うから違うのではないし，まして名まえが違うから違うのでもない。

それでは，違う動物とは，何を手がかりにして定められるのだろう。わたしたちは，それをちゃんと知っているのである。オタマジャクシとカエルは，違う名だが違う動物だろうか。ヤゴとトンボはどうか。ニワトリとヒヨコ（とタマゴ）は。ブリとハマチとイナダは。これらの例を考えてみれば，これらの名は第1の原理でつけられていること，外見はいくら違っても，親子・老幼による違いは同じ動物内の違いであること，がわかる。また，シオカラトンボとムギワラトンボ，ギンヤンマのギンとチャン，ハイタカとコノリ，と並べてみれば，雌雄の外見が違うために，第1の原理によって違う名がつけられていることがあることもわかるだろう。

要するに，同じ動物（同種の動物）とは，外見や名まえとは関係なく，自由につがいになりうるものと，その子である。家畜の品種や色変わりは，これとは違う。人種も同様で，これらは同じ動物（種）内の外見の違いにすぎないのである。■　（U）

漢字のふるさと　17

藤堂明保



蝙蝠（こうもり）　ヘンプクと読む。戸板も平らだし，短冊もうすっぺらい。そこで「戸＋冊」で扁と書き，薄く平らなものを表わした。「扁」を含む字は，篇（平らな竹札），遍（平らに広がる）のように，すべてこの意味を共有している。

コウモリが飛ぶときには，飛膜を開いて，薄く平らな葉が舞っているように見える。そこで「虫」（動物のこと）と「扁」を合わせて蝙と書いた。

フクということばは，「ぴたりとへばりつく」との意味を含んでいる。たとえば衣服の服（ぴたりと体につける），伏（ぴたりと地面にへばりつく），幅（ぴたりとあてるひざ掛け）のように。コウモリが陸に止まっている時には，まさにへばりついた姿を呈するので蝠という。飛ぶ姿と止まる姿を合わせて蝙蝠という。その発音が「遍ねき福」と通じるので，中国ではおめでたい模様として描かれている。■



ハイエナ科　*Hyaenidae*

ハイエナは，獰猛で，ずるがしこく，残忍な動物と考えられてきた。そのうえ，墓をあばいて死体を食べると非難されているため，動物園などでは，恐ろしいとか，いやらしいとかいう気持を人びとに起こさせ，冷ややかな目でもって見られている。

数世紀このかた，この食肉目の動物をめぐって，途方もないような架空の伝説がたくさん伝わってきている。古代からの伝説として，イヌがハイエナに出会うと声が出なくなり感覚が麻痺するとか，ハイエナが人間の声を実にうまくまねするので，人間をわけなく自分のほうへ引き寄せて襲いかかる，というような話がある。アラビア人は，ハイエナの脳髄をなめると，たちまちその人は水を恐れるようになるという。また，ハイエナは動物の姿をしているが，実は人間に害を与える魔女であるともいっている。

ハイエナはちょっとイヌに似ているが，イヌよりもずんぐりしている。首はたくましく頭は重そうで，あご骨は幅広く，尾は退化して短い。前肢（ぜんし）が後肢よりも長いので，この動物の姿はしりすぼみで，あまり格好がよくない。足にはふつう４本のかぎづめがあるが，そんなに鋭くなく，ネコのように出したり引っこめたりすることはできない。

目がつりあがっているので，表情はかなり不愉快な感じを与え，陰険にみえる。毛並みはあらく，がさがさしていて，背のほうでは毛が立って，たてがみのようになっていることが多い。毛は全体に明るい褐色だが，色の濃い斑点や縞がところどころにある。

歯は短くて太く，ものすごく強い。この歯はどんなにかたい骨でもかみくだくことができるから，他の肉食獣が捨てていったえさの

フチハイエナ。ハイエナ科。
ハイエナは，またの名をタテガミイヌという。
首から肩へのさか立った毛と短い尾を別にすれば
なるほどイヌそっくり。
体長は150センチ，尾長は30センチほどである。
PH. L. MARGIOCCO



ハイエナ科の分布地域。
マダガスカルをのぞいたアフリカ全土
地中海東岸からベンガル湾にいたる
南アジアにひろがっている。
ハイエナ科には，３属４種がふくまれる。



ブチハイエナの子ども。
ふつう，ブチハイエナは1産2子で
それ以上生まれることは少ない。
この動物の場合，雌雄の区別が困難で
とくに幼獣では不可能なくらいである。（上）
PH. J. DRAGASCO–ATLAS PHOTO

残りでもなんでも，食べてしまう。それはまた，オオカミをとるわなの金具でもねじ切ることができるほどである。ハイエナはまた，非常に強い咬筋（こうきん），よく発達した唾液腺（だえきせん），円錐形の味蕾〔注1〕をもっている。肛門（こうもん）と尾との間には，吐きけをもよおすようなにおいを出す分泌（ぶんぴ）腺がある。〔注2〕

ハイエナの鳴き声は，しわがれたような，無気味なあざ笑う声に似ていて，非常に不愉快である。そのうえ分泌腺からはいやなにおいを出すし，びっこをひいているような歩き方をするので，人間にとって決して魅力的な動物ではない。

ハイエナの分布地域は，非常に広い。ハイエナ科には，ハイエナ類とアードウルフ（ツチオオカミ）とがふくまれ，これらの動物はアフリカのほとんど全域，南アジアのベンガル湾にいたる地域に分布している。とくにハイエナ類は，岩とやぶ地が点々とある草原や，丈の低い灌木地帯に生息し，またステップ地帯や砂漠でも見かけられる。

屍肉を求めてさまよう

ハイエナ類は，昼間もよく見られるが，ほんとうは夜になってから活動を始める。太陽が沈んだと思うと　町から遠く離れたあたりで，もうハイエナの気味の悪いほえ声が響きわたる。夜どおし，ハイエナたちはさまよい歩いて，ときには人家の中にまではいってくるが，少しでもあぶないと感じるとすぐ逃げる。かれらが巣穴に帰るのは，ようやく夜が明け始めてからである。

ハイエナのあざけり笑っているようなほえ声は，広く知られているが，シマハイエナの場合は，とくに不愉快である。えさを捜しているときには，また違った別の声を出す。それは，しわがれて間延びしている声が，だんだんと鋭い叫び声に変わっていく。

ハイエナは夜に荒らしまわるときには，沈黙を守りつづけながら獲物のにおいをかぎつける。それから四方に目を配り，鼻をひくひくさせていつでも逃げだせる構えで小走りに進む。えさとなる死体が見つからなかったときは，身を守る力もない小さい動物を襲う。

飢えにかられると，ヒツジやヤギなどの家畜，さらにはウシさえも襲うことがある。しかし，ふつうハイエナ類は，元気のよい動物には襲いかからない。なるべく，病気やけがをしていたり，死んでいる動物を見つけてえさにする。かれらは，群れをなしてレイヨウ類を追いつめ，押し倒してむさぼり食うこともある。しかし，それは例外である。かれらにとっては，屍肉にまさるごちそうはないのである。死体を見つけると，もう生まれついての慎重さはどこえやら，がつがつしながら死体のまわりを回り始める。かれらはすぐに獲物の奪いあいを始め，やかましく声を出して猛烈に格闘する。

ハイエナ類は，死んだけものを食べるので，実際はむしろ有益な動物だといえる。アフリカのある部族は，夜，ハイエナを村のなかへ入れてやる。するとハイエナたちは，小屋の前に捨ててあるくずなどを食べて，掃除夫の役目をする。しかし，家畜に害を加えるので，この掃除係というたったひとつのとりえは，影が薄くなってしまう。

シマハイエナは，人間を襲うこともあるが，しかし，それ以上にブチハイエナが，人間にとって危険だということは，事実である。

ブチハイエナは，たいていの場合，子ども，けが人，眠っている人を襲うが，ときには屈強な人間に対してもひるまずに立ち向かってくる。ハイエナはいつも腐った肉を食べているので，人間が襲われると，たとえかみ殺されなくても，そのかまれた傷口にハイエナの口のなかの細菌が侵入して，破傷風や敗血症になって死ぬことがある。アフリカのある地域では，ハイエナは厄病神のように思われ，情け容赦もなく追いまわされている。

ハイエナ科の動物は，次の特徴をもつ。

- 豊かで，たくましい胴体と量感のある頭部をもつ。
- 歯は，アードウルフをのぞいては非常に強く，34本——門歯3／3，犬歯1／1，前臼歯（きゅうし）4／3，臼歯1／1——である。
- 四肢（しし）は，比較的長く，指行性である。
- 足には4本の指があるが，アードウルフは例外で，前足に5本，あと足に4本の指をもっている。

ハイエナ科は，かつては，今よりもはるかに広い地域に分布し，フランス，ドイツ，イタリアにも生息していた。そのことはこれらの国々から，ハイエナ類の骨の化石が見つかっていることで証明される。

今は西南アジアおよびアフリカに分布し，シマハイエナ属（シマハイエナとカッショクハイエナ），ブチハイエナ属，およびアードウルフ属の3属4種がある。

シマハイエナ　*Hyaena hyaena*

シマハイエナは，動物園でもっともよくみられる動物の1つである。毛は長く，いくぶんちぢれていて，しかもざらざらしている。色は黄色みをおびた灰色で，帯のような横縞がたくさんある。たてがみの剛毛も，のどとほおをおおっている毛も黒っぽい。頭部は大

ブチハイエナ。一般にハイエナは
からだの割りに尾が短い。
尻が下がり，おせじにもスマートとはいえない。
おまけに，悪声といやなにおいの持ち主だから
よけいきらわれている。（右上）
PH. FIÉVET–JACANA

シマハイエナ。ハイエナ科。
大きくとがった耳，黒っぽいたてがみ
四肢のあざやかな縞などが特徴である。
体長は100センチ，尾は30センチ。
ハイエナ科では唯一の単独生活者である。（右下）
PH. FIÉVET–JACANA

きく，耳はぴんと立ち，とがっていて，毛がない。体長は約１メートルで，尾長は30センチ。

シマハイエナの分布地域は非常に広く，アフリカの一部と，地中海からベンガル湾までの，セイロン島をのぞく西南アジア全域にわたっているが，ほとんどの地域で絶滅しかかっているのが現状である。シマハイエナは，森よりも草原のほうを好む。また1500メートル以上の山地ではみられない。動物の骨や死体がたくさん見つかるところにしかすみつかず，村のなかにもためらわず侵入する。

シマハイエナはブチハイエナよりも弱くて用心深いから，人間に襲いかかることは非常に珍しい。イヌにいどまれると，強さはそう変わらないはずなのに，逃げだしてしまう。シマハイエナはヒツジやヤギを襲うこともあるが，とくに腐肉が好きで，ハゲワシやジャッカルとその肉を分けあって食べる。

シマハイエナは，ハイエナ類のなかで群れをつくらないただ１つの種である。１匹でいることが好きで，あまり仲間づきあいはよくない。

非常に小さいうちに捕えれば，このハイエナは飼いならしやすい。なかなか利口なところもあるし，飼い主にはよくなつく。幼いときは，子イヌのように人なつこく，よくじゃれるが，成獣になると，いやなにおいがするのと，いまわしいあざ笑うようなほえ声のために，家で飼うにはどうもぐあいが悪い。

シマハイエナは飼育されていると，どんな肉でも受けつけるが，ハゲワシの肉だけはいくら空腹でも食べない。飼われているシマハイエナたちは，おたがいにけんかをしない。このことから孤独が好きだとしても，環境しだいでは，たがいに仲良く暮らすこともできるということがわかる。

ブチハイエナ *Crocuta crocuta*

ブチハイエナは，からだ全体にわたって，褐色の斑点が黄色っぽい体毛の上にちらばっている。シマハイエナとくらべて，大きくて強く，頭骨は幅広く，耳は小さい。たてがみはなく，尾には褐色の輪状のまだらがあって先端は黒い。個体によって，毛の色には多少の濃淡の差がある。体長は，150センチに達し，尾は30～35センチであり，肩までの高さは80～90センチくらい。

ブチハイエナは，アフリカのサハラ砂漠以南の大部分に生息している。その生態は他の







ブチハイエナ。草原のかなたに日が落ちるとき
ハイエナたちは穴を出る。
そして明けがたまで，他の肉食獣の残した屍肉を
捜して歩きまわる。
《草原の掃除屋》，これがかれらのあだ名だ。

PH. A. MARGIOCCO



ハイエナによく似ているが，並みはずれて強いから，とくに恐ろしい存在である。ブチハイエナが，人間にいどまれもしないのに襲いかかるということを，たくさんの旅行者がいっている。この動物がきわめて大胆になるのは，空腹になったときで，人家にはいって子どもをさらっていくこともある。夜には，人里離れた道をいく旅行者たちを，危険にかまわず群がって襲うこともする。ただ，火は敬遠する。

現地の人たちは特別製の落とし穴など，いろいろな種類の仕掛けを考え，さまざまな型のわなでブチハイエナの狩りをする。しかし，この試みは，必ずしもうまくいくとはかぎらない。それはこの肉食獣が，実に抜けめなく，わなを避けてしまうからである。

ブチハイエナは，夜の間にかなりの長距離を走りまわる。そのいまわしいほえ声は，日の暮れるだいぶ前からだんだん騒がしくなってくるが，真夜中にならないと村落には近づいてこない。

この動物は獰猛だから，完全に飼いならされることは決してない。飼育されていると，何時間も身動きもしないでいる。そうかと思うと，ふいにとびあがり，取り乱したようすであたりをながめ，おりの格子にからだをこすりつけたりする。寿命は約25年である。

ブチハイエナは，長い間，雌雄同体（注3）であると信じられていた。というのは，雌雄を見分けるのがむずかしいからで，とくに幼獣の場合には，その識別が不可能に近い。

14日間という規則的な発情周期をもってはいるが，交尾期は一定しない。ふつう，1産に1，2子でそれ以上のことは少ない。自然のほら穴の中か，あるいは母親が掘った穴の中の，何も敷かれていない地面の上に生みおとされる。子どもが小さくて弱いうちは，母親は子どもを見守り，生命の危険から守る。子どもたちが成長すると，母親は無関心になり，危険なときにもほうっておいて自力で生活させる。幼獣の毛並みは細く短く，人間の髪の毛を思わせる。毛色は濃褐色で斑点はない。

ブチハイエナは，食物をとるために，よく群れをつくって集まる。仲間争いが起こると強いものが弱いものをかみ殺し，その肉をむさぼり食うことさえある。



ブチハイエナ　ハイエナの歯は非常にじょうぶで
オオカミ用のわなの金具もねじ切ってしまうほど。
だから，アフリカスイギュウのつのであっても
かれらにはたいへんなごちそうだ。
「さあ，これからゆっくり味わうとするかな」
PH COMET

アードウルフ　*Proteles cristatus*

アードウルフ，別名ツチオオカミは，シマハイエナにたいへんよく似ているが，耳がず

水浴びをするブチハイエナ
この動物のもついやなにおいは，肛門腺から
分泌される。それは，水につかったところで
消えるようなしろものではないか，かれらには
仲間を区別するしるしになっている。
PH MYERS AFRIQUE PHOTO



ようにたべる。前足は他のハイエナ科のものと違って指が５本あるのが特徴である。歯は他のハイエナ類にくらべると弱く、とくに臼歯（きゅうし）は消滅しかかっているようにみえる。しかし、他の種の動物にとっては相当強いはずだ。

体長は約80センチで、尾は30センチ。毛並みは非常に柔らかい綿毛と、針のような長毛とからなる。黄色みがかった地色の上に、黒い横縞が浮き出ている。頭部は黄色い霜降り模様のあるくすんだ色で、鼻先は濃褐色である。胴体の下側は暗黄色で、尾は半分黒い。背中の毛は長く伸びて黄色の混じった、くすんだ色のたてがみとなっている。

アードウルフは、アフリカの東部、中央部と南部に分布し、おもにスーダン、ソマリアからケープタウンにいたる地域にすむ。

この動物もまた夜行性である。昼間はツチブタ（アフリカアリクイともいい、管歯目（かんしもく）に属している）が捨てていった巣穴の中に身をひそめている。このツチブタの巣穴には入り口がいくつかあって、アードウルフが何匹もすむことができるほど広い。アードウルフはかなり[illegible]く、おまけに犬歯が強いので、敵と戦うときにはじゅうぶんにその強さを発揮できるわけである。ところが実際には歯を使わず、肛門腺（こうもんせん）から、しゅうこう性の強いにおいのする分泌（ぶんぴ）物を噴射して身を守る。

１回に生む子の数は、ごく一般には２匹なのだが、寄り集まって共同で子を育てるので、６子を生むと長い間信じられてきた。

アードウルフは、おもに昆虫（こんちゅう）を食べている。とくにシロアリを食べ、強いつめでシロアリの巣を掘りおこして狩りをする。しかしまたハツカネズミ類や、地上に巣をつくる鳥類の卵を食べることもある。飼育生活では牛の肉も食べるが、煮たり焼いたりしたひき肉のほうが好きだ。この動物は、非常に数が少なくなっているので、アフリカ各国では動物保護のための協定を結び、厳重に保護すべき種として分類している。

アードウルフ（ハイエナ科）。
他のハイエナ類と違って、臆病だから、
イヌを見ただけで逃げだしてしまう。
ふだんは、昆虫、とくにシロアリを食べている。
体長80センチ、尾は30センチほど。
PH. DES BARTLETT / DENIS PRODUCTION



ジャコウネコ科　*Viverridae*

ジャコウネコ科の動物が地球上に現われたのは、きわめて古い時代である。イタチ科の動物と同じように、種によってかなりの形態の差がある。しかしその分布は、イタチ科よりもはるかに狭く、だいたい旧大陸の熱帯地方に限られている。

生息の場所はさまざまで、あるものはアフリカやアジアのステップ、砂漠、岩山、あるいは林間の荒地に集まり、他のある種は地味の豊かな草原のなかにすみつき、また川沿いや水辺のアシ原にもいる。またある種は、森林のなかのもっとも密生した、薄暗い場所に引っこんでいる。

ジャコウネコ科のなかには、木登りのじょうずなものもいる。しかし全体としてみると、この科の動物は地上生活である。岩の裂けめや木のほらの中や、ほかの動物の巣穴を見つけると、それを奪って、そこで生活する傾向がある。

ジャコウネコ科の多くは夜行性である。しかし、昼に獲物を捜しにいくものもいる。あるものは指行性で、指の先だけを地面につけて歩くが、別のものは蹠行（しょこう）性で、足のうらの、ほとんど全体を地面につけて歩く（注4）。

ジャコウネコ科の動物のおもな特徴に、用心深いということがあげられる。からだのいちばん小さい種類のものは、ヘビのように地面をはって進むことができるといわれている。これはほかのどんな種類の哺乳（ほにゅう）類にもできない特技である（注5）。嗅覚（きゅうかく）と視覚は、よく発達しているが、その程度は、種によってかなり異なっている。触覚はあまり鋭くはない。

肛門（こうもん）部には分泌腺（ぶんぴせん）があって悪臭のある物質を分泌し、それを特別の袋（香嚢（こうのう））または腺嚢）の中に集めてためておくことが多い。

この科のなかでも、ジャコウネコ属 *Viverra* やヤシジャコウネコ属 *Paradoxurus* は、じゃこう臭が非常に強い。しめきったところでは、



マングース科の動物は、だいたい
口先が長くとがっている。これは
巣穴にひそむ昆虫を食べやすくするための
形の配慮かもしれない。歯数は36～40本。
PH. LARIVIERE / ATLAS PHOTO

ジャコウネコ科の分布。
アフリカ本土、東南アジア
および地中海沿岸の一部にすんでいる。
食肉目中、もっとも多くの種類を含っていて
34属、約75種を数える。



とてもがまんできないほどである。

ジャコウネコ科は、食肉目のすべての動物と同じように、1回に1匹から6匹までの子どもを生む。母親は、非常によく子どもの世話をする。子どもが乳を離れると、多くの種では、雄が雌を助けて、新生児に必要なえさを捜す。小さいうちに捕えれば、飼いならすのはやさしい。

ジャコウネコは世界各地で、とりわけエチオピアでは、集約的に飼育されている。この動物のじゃこう腺の分泌物から、じゃこうねこ（麝香猫）香（霊猫香、シベット）という香料の原料をとるためである。この香料は、植物性の香料と異なり、長い時間香気を保つことができる。

一般にこれらの動物は、農業に及ぼす損害よりも、有用性のほうがはるかに大きい。つまり、ジャコウネコ科はみな、果実が大好物であるが、ネズミやヘビのような有害な動物もたくさん殺すからである。

古代のエジプト人は、ネコを知るまでジャコウネコ科の一種であるエジプトマングースを神聖なものとして崇拝していたほどである。

ジャコウネコ科の動物には、次のような特徴がある。

とくにマングース類は、このような有害動物をコントロールするために、西インド諸島、ニュージーランド、ハワイの各地に移入された。なかには増殖しすぎて、ニワトリ小屋を襲うものも出たという。

● 大きさは、体長17センチのものから、100センチぐらいまで。

● 胴が長く、敏捷で、多くの場合、体形が優美である。

● 歯の数は、36から40。つまりあごの片側について、それぞれ上下に、門歯3/3、犬歯1/1、前臼歯（きゅうし）(3-4)/(3-4)、臼歯は(1-2)/(1-2)。

● 四肢（しし）は短く、指行性または半蹠行（しょこう）性で、ほとんどすべて5指をもっている。

● かぎづめは、ネコのように完全に出し入れできるもの、不完全にしかできないもの、まったく出し入れできないものなど、さまざまである。

食肉目のなかでは、この科の動物がもっとも種類が多い。

ジャコウネコ科に属する動物は34属、約75種にのぼっている。

その分布域は、アフリカとアジアの熱帯地方、フランス南部とイベリア半島である。

チビマングース　*Helogale parvula*
ジャコウネコ科チビマングース属
この動物は、マングース類のなかで
もっとも小さく、体長は約20センチしかない。
それでも、イタチ科の動物にくらべれば大きい。
PH. L. BURTON/PHOTO RESEARCHERS

チビマングースの親子（ジャコウネコ科）
マングースの両親は、子どものめんどうを
実によくみる。家族おもいの父親は
子どもが離乳したあとでも母親を助ける。
「いってらっしゃい、パパ」（21 10. 11）
PH. OKAPIA



ブチハイエナの母子。ふつう，他の動物が使わなくなった穴などに子どもを生みおとし，一人まえになるまで，細かく世話をやく。しかし，子どもが成長したそのあとは，どんな危険が襲うとも知らん顔だ。子どもにとっては，今がいちばん幸せな時期。母親に無心にとりついて乳を吸う。人間に評判の悪いハイエナでも，母親としての顔は，つねに柔和だ。

PH. OKAPIA







フォッサ属　*Cryptoprocta*

フォッサ　*Cryptoprocta ferox*

フォッサは，歯の数が少ないのと，出し入れのできるかぎつめがある点では，ネコ科のほうに分類したくなる。しかし，大きな腺嚢（せんのう）が肛門（こうもん）部にあるので，ジャコウネコ科の一属とされている。フォッサという名は，この動物がこわがったり，おこったりしたときに出す《フーシャ》という音からきている。

フォッサは，全長170センチに達することがあるが，その半分は尾の長さである。脚（あし）が非常に短く，アメリカのヤマネコであるジャガランディ *Felis jaguarondi* によく似ている。毛並みは短くて細く，頭部と脚の毛はそられたようにみえる。全体の色合いは黄褐色で，からだの上側のほうが色が濃い。長い口ひげは白と黒が混じっている。緑がかった黄色い目は，ネコの目に似ている。

フォッサはマダガスカル島にすんでいて，そこの食肉目のうちではいちばん大きい。だからそこでは，その大きさのために恐れられているが，実際はそれほど獰猛ではない。この動物は，よく茂った密林のなかに暮らしていて，交尾期のほかは単独で生活している。交尾期になると，4匹から8匹ものフォッサの群れに出会うことがある。

ふつうこの動物に近づこうとすると，いつも攻撃的な態度をみせる。

マダガスカルの人びとは，フォッサが足でたき木を散らして火を消してしまうと断言している。またフォッサはひな鳥が食べたくなると，ニワトリが死んでしまうほどの悪臭を，ニワトリ小屋の周囲にまき散らすともいっているが，これらは，まったく根拠のない話である。

しかし，このジャコウネコがニワトリ小屋を荒らしまわり，ブタやそのほかの家畜も平気で殺してしまうというのは，ほんとうである。フォッサの好きな獲物は，なんといってもキツネザル類で，これが昼間，木の上で眠っているところを襲って殺す。

フォッサをつかまえるのはやさしい。その肉はおいしいという。この動物が，今日非常に少なくなったのは，人間の食用として捕獲されたためであろう。





ビントロング　ジャコウネコ科ビントロング属
アジアにすむジャコウネコ科の動物のうち
もっとも大きいからだをしている
体長は65〜90センチ，尾もだいたい同じ長さ
ぴんと張った白いひげがりっぱだ（左）
PH. RUSS KINNE PHOTO RESEARCHERS

シママングース　ジャコウネコ科
シママングース属　別名マング
サハラ以南のアフリカに分布
木や水辺の茂みにすんでいる
雑食でネズミ，昆虫，クルミなどを食べる（下）
PH. L. SIRMAN

シママングース属　*Mangos*

シママングース　*Mangos mungo*

シママングースはマングと呼ばれることもあるが，ジャコウネコ科のなかで，もっとも美しい動物である。体長は40センチ以上，尾長20センチで，毛はかなり豊かである。全体の色合いは，灰色がかった淡い黄褐色であるが，毛の1本1本が，白や黒あるいは淡い黄褐色のまだらになっている。背中には多少色の濃い横縞が，不規則に配置されている。口先と胴の下部は，錆色である。鼻鏡（びきょう）は黒い。

シママングースは，サハラ砂漠より南のアフリカの大部分にすんでいて，イワダヌキ〔別名ハイラックス，イワダヌキ（岩狸）目に属する小哺乳（ほにゅう）類〕で，モルモットに

フォッサ　ジャコウネコ科フォッサ属
マダガスカル島で最大の肉食獣
すでに絶滅しかけているうえに夜行性だから
めったに見ることはできない
体長80〜85センチで，尾も同じ長さ（上）
PH. F. PETTER



[illegible]

[illegible]は5〜20匹ぐらいの群れで行動する。
昼間に活動し、忙しげに歩きまわっては
円を描いて元の場所へもどってくる。
危険があると立ちあがって、あたりを確かめる。
PHILIPPE CASSELET - ATLAS PHOTO

[illegible]ている[illegible]に生活するのが好きなようにみえる。また地中生活型のリスと、仲良く暮らしていることもある。

昼の間しか獲物を追いまわさない。ヘビのように岩のあいだに静かにすべりこみ、小型の哺乳(ほにゅう)類、鳥類、両生類、それに昆虫(こんちゅう)などを捕えて食べる。

野生のときも飼育下にあっても、雑食性である。この動物が卵の殻やカタツムリの殻を割っているところが、しばしば観察されている。シママングースは、殻を前足で高く差しあげ、非常にこっけいな身ぶりで、石などのようなかたいものに投げつけて割る。

シママングースは、打ち捨てられたシロアリの塚(高さ5、6メートル、直径25〜30メートルに達するものさえある)を、何匹かで占拠する習性がある。そこを拠点として草の茂ったステップ地帯を、長い間ぞろぞろと歩きまわる。ときどきそのなかの1匹がピョンピョンと跳び歩くのをやめ、あと足で立ちあがり、あたりをうかがう。するとその群れ全体が歩くのをやめて、そのまねをする。それはまるでその集団が、1つの命令に従っているかのようである。

日なたが大好きで、暇さえあれば日光浴をする。鳴き方は、口笛のような音の混じったさえずり声で、ひとしきり鳴いた後に、イヌのほえ声のような太いしゃがれ声になる。シママングースはかなり大胆で、人間に出会っても、逃げないばかりでなく、明らかな好奇心を表わして、じっと人間を見守っている。

西アフリカでは、シママングースが、原住民の部落や伝道のための教会にも、また川を行き来する船の上にもいて、まったく自由な生活を楽しんでいるかのようにみえる。シママングースも、ネコと同じように、人間よりはその人間の住んでいる家や庭が好きなのである。そして、人間にも愛情を示すことを知っていて、人の腕のなかにちょこんとうずくまり、特有のかわいい鳴き声で甘える。しかし、ちょっとでも目を離すと、なんでも奪いとって遊びだし、結局はそれらをどこかへやってしまったり、こわしてしまったりする。

2匹のシママングースを飼っていた人の話では、かれらは飼い主を完全に覚えたという。飼い主の声を聞くと、そのシママングースはおりの戸口に駆けよって、外へ出してくれとねだるしぐさをするのだった。おりから出してやると、家の中をあちこち駆けまわり、かわいらしいようすではしゃぎ、いたるところを捜しまわったという。牛乳が大好きで、それをしまってあるところをちゃんと知っていたということである。



マングース属　*Herpestes*

マングース属にふくまれている動物は、長い胴、とがった鼻づら、[illegible]をもつ。先の細くなった長い尾をもっている。足には、出し入れできないかぎづめをそなえた指が5本ある。足が短いから、胴体は腹の毛が地面にふれるくらい低い。とはいえ、このマングースたちは地面をはっているのではない。むしろとびはねながら歩いているのである。またすばらしい速さで走ることもできる。マングース属にはじゃこう腺（せん）がない。

アジア、アフリカの熱帯地方に生息しているが、エジプトマングースだけは例外で、これは地中海沿岸地帯にいる。

ハイイロマングース

Herpestes edwardsi

別名[illegible]ともいい、体長は40～50センチで、尾は比較的短い。毛は灰色で長くさかだっている。毛の先端は、幅広く白い輪状のまだらになっていて、そのために色調は、銀色のようなつやのある、明るい灰色のようにみえる。



[illegible]
さしもの活動家もいまはくたびれはてたのか、地面にからだをなげだして休んでいる。毛はあらく、暗褐色のからだの背や腰[illegible]黄やにっぽい縞が幾本かはしっている。[illegible]
PH. DRAGESCO ATLAS PHOTO

カニクイマングース　*Herpestes urva*
[illegible]かぎつめがよく発達しており、これでカニの甲などを割る。木登りは、あまりうまくないようだ。尾はつけ根で太く、先細りになっている。
PH. P. PFEFFER AFRIQUE PHOTO



分布は、アラビア、イラン、アフガニスタンからセイロン島、さらにインド、ネパールにまでひろがっている。

この動物は、小さな林や畑のなか、灌木の散在する川岸、やぶの多い、岩のごろごろしている斜面などに好んですんでいる。

よくニワトリなどの家禽を襲って殺す。果実も好んで食べるが、どちらかといえば、けものの肉のほうが好きである。ネズミ、トカゲ、ヘビを捜して岩の穴や割れめのひとつひとつをあらためながら、岩から岩へと走りまわる。

ニワトリをつかまえようとするときには、地面にのびて死んだふりをする。好奇心にかられ、何かと思って不用心なニワトリが近づけばつかまってしまうのである。

このマングースが、毒ヘビに戦いをいどむことは有名である〔注6〕。並みはずれたすばしこさで、自分のからだの小さい弱点を補い、猛毒をもつコブラにさえ勝つのである。

原住民は、マングースがヘビにかまれると、《ムンゴ》という苦い植物の根を、急いで食べるのだと思っている。この植物がヘビの毒を消してしまうので、再び戦えるのだという。この話は、ただの伝説にすぎない。

マングースの最大の武器は、すばしこいことである。そのうえ皮が厚いということも、ヘビにかまれたときに、傷つけられることを確かに防いでいる。この動物がヘビの毒に対して免疫をもっているというのは当たらないが、他の多くの哺乳（ほにゅう）動物にくらべると、解毒能力があるということは、ほんとうである。

すべてのマングースのなかでは、ムンゴがいちばん飼いならしやすい。きれい好きで、快活で、おまけにおとなしい。ハツカネズミやドブネズミを追って、ムンゴが家の中にはいりこんでいることがよくある。ネズミを追いまわすのは、昼の間だけである。人家の中へはいると、穴や裂けめなど、ネズミの隠れていそうなところを、すべて念入りに調べる。ムンゴの嗅覚（きゅうかく）は、非常に敏感なので、すぐに獲物の居場所をかぎだしてしまう。

ムンゴは飼い主によくなつくから、飼い主から引き離されたムンゴが、かたくなにものを食べず、とうとう衰弱して死んでしまったという話が伝えられているほどである。

エジプトマングース

Herpestes ichneumon

《ファラオのネズミ》というあだ名をもつエジプトマングースも、きわめておもしろい動物である。古代のエジプト人たちは、これを神聖な動物としてあがめていた。ネコを発見して飼う前には、このマングースが穀倉を荒らすネズミに対する、ただ1つの防御法であった。

古代の書物には、エジプトマングースについて、驚くべき記述がみられる。ヘロドトス〔紀元前5世紀のギリシャの歴史家〕は、この動物が眠っているワニの口にはいって、内臓を食い荒らすといっている。アリストテレス〔紀元前4世紀のギリシャの哲学者、科学者〕は、エジプトマングースはとても臆病で、大きなヘビを攻めるときには、ほかのマングースに応援を求めるほどだと述べている。これと反対にアイリアノス〔紀元3世紀前半のギリシャの作家〕は、この動物はまったく独力で獲物をとることができると断言しているが、さらに、この動物がからだにどろを塗ることをつけ加えている。どろがかわくと、それがかたい殻になって、からだを守ってくれるというのである。

成獣になったエジプトマングースは、体長約55センチで、尾は45センチである。4本の脚（あし）はかなり短く、そのために実際より小さく見える。肩までの高さは、もっとも発育のよい雄でも、20センチを越えることはあまりない。からだつきは細いが、ジャコウネコ科に属する他の種類のものよりは優美ではなく、むしろがっしりしている。

体重は、7キロから9キロの間である。足のうらには毛がはえていない。短い皮膜（ひまく）が指を半分までおおっていて、指をつないでいる。尾の根もとは非常に幅が広く、しかもふさふさした毛があるので、ちょっと見ると胴の延長のようにみえる。

まるいひとみの目は小さいが、生き生きしている。目の周囲には、毛のない部分があるので、とくに目がくっきりと見える。毛並みは、柔らかい綿毛が下毛として密生していて、それを6、7センチのあらい上毛がおおっている。

エジプトマングースは、アフリカの地中海沿岸、パレスチナ、イベリア半島に分布している。イベリア半島には、《メロンチルロ》あるいは《メロン》と呼ばれる変種がいて、人の住んでいる近くでもよく見かける。エジプトでは、木のはえている川岸や、ヤシの茂みのなかに生息している。このような地方では、細い道をたどっていくと、このマングースの穴にいきあたることがあるが、その穴は、非常に狭くて深い。

子どもが生まれるのは、春または夏のはじめである。子どもは、一度に2匹から4匹生まれる。雌は長い間、子どもに乳を飲ませる。

コブラと戦うマングース。
この動物は、コブラにとっては恐ろしい大敵。
その常勝の秘訣は、コブラの毒に対して
免疫だからと信じられてきたが、実際は
機敏に毒牙からのがれているのだ。（上2枚）
PHOT. DELFEVNT

エジプトマングース。
ジャコウネコ科マングース属。
古代エジプトでは、神獣として崇拝されたが
それは穀物を荒らすネズミを退治したからだろう。
体長55センチ、尾長45センチである。（右下）
PH. A





雄は雌とともに子どもたちを守る

昔は神獣，今は害獣

エジプトマングースは，こわがり屋で用心深く，草木のない見通しのよいところでは，決して狩りをしない。いつも茂みの間，やぶのなかを注意しながらはいまわる。ノウサギよりも小さい哺乳（ほにゅう）類や，ひな鳥からダチョウにいたる，ありとあらゆる家禽類など，つかまえたものはなんでも食べてしまう。またトカゲやヘビ，カエル，昆虫（こんちゅう）なども食べる。果実も食べるようだ。この動物は，ヘビを退治してくれるが，ニワトリ小屋やハト小屋も襲うので，今ではエジプトの農民たちからきらわれている。

エジプトマングースは，特別な歩き方をする。四肢（しし）をまったく使わないで，まるで地面をはっているように見えるが，それは長い毛で，足が隠れてしまっているからである。

夏には，ほとんどいつも，家族が連れだって歩いている。その場合は，何匹かが前後にぴったりとくっついて，まるで1匹の長いヘビのように，鎖状につながって進む。ときどき父親は立ちどまって頭をあげ，家族をおびやかす危険はないかと確かめるように，鼻をひくひくさせて，周囲のけはいをかぐ。

何か獲物がいるのを感じると，音もなく近づいて，不意に襲いかかる。非常に活動的だから，飛んでいる鳥さえもつかまえることができる。

エジプトマングースが獲物を見つけるときは，そのきわめて敏感な嗅覚（きゅうかく）にたよっているようだ。ふつうは獲物を殺しても，その脳髄（のうずい）をなめ，血液を吸うだけで満足し，肉まで食べることはしない。また，卵が大好きで，見つけようものなら，まるごと飲みこんでしまう。

エジプトマングースの声が聞けるのは，けがをしているときと交尾期だけである。しかし，ひどい傷を受けても，黙ってがまんしているものもいる。エジプト人は，交尾期には，かなり単調でかん高い，口笛のような鳴き声を聞くことがあるといっている。

エジプトマングースのいちばん恐ろしい敵は，人間である。もう1つの敵はナイル川の洪水で，これにはよく巣穴を水びたしにされる。しかし泳ぎはうまく，また村と村を連絡している土手の上を走りまわり，洪水の難を避ける。

捕獲され，飼育されているときには，きれい好きでおとなしい性質を発揮する。ただ，木や家具をかじるという困った習性がある。しかし，一方では，家の中にいるドブネズミやハツカネズミを，あっというまに駆除してくれる。



スリカタ属　*Suricata*

スリカタ　*Suricata suricata*

スリカタは，南アフリカとくにオレンジ川の南に生息している。口先のとがった頭部，長い脚（あし），4本の指をもった足，といった点で，他のジャコウネコ類と区別することができる。もっとも特徴があるのはその足で，がんじょうなつめがあり，とくにあと足のつめが発達している。このつめを使って，深い穴を掘る。

スリカタは，小さい優美な動物で，全長50～60センチ，そのうちの25～30センチが尾である。毛並みは，手ざわりがあまりよくなくて，灰褐色で黄色っぽいつやがある。背の上部には8～10本の濃い縞がある。

歩くときは，足のうらのほとんどを地につけている。獲物を待ちかまえているときは，あと足でまっすぐ立っているのだが，そのときの円錐形のような格好は，珍妙である。こんな窮屈な姿勢のままで，何歩か歩くこともある。

いちばん発達している感覚は，嗅覚（きゅうかく）である。聴覚は弱く，視力はふつうである。この動物は，前足を使って食物を口に持っていく。

スリカタを飼いならすことは簡単で，飼育生活にはすぐなれ，自分に愛情を示してくれる人を覚える。ドブネズミ，ハツカネズミなど，有害な動物を退治してくれるから有益な動物とみることができる。

イナゴやシロアリなどの昆虫（こんちゅう）や，ヘビ，トカゲ，ネズミや小鳥，卵などを食べるほかに，その鋭いつめで植物の球根やイモを掘りおこして食べている。

1産2～4子で，11月から2月までの間に出産する。水辺が好きなので，南アフリカのオランダ移民は，この動物のことを「沼地のネコ」（Mierkat）と呼んだ。

……な活動家で，夜になると……や球根を掘って食べる……25～35センチで，尾長もほぼ……

……動物……の記念撮影みたいなかまえは，獲物を待ちかまえているところ。目つきが鋭く，前方をにらむところは すでに獣をのんで，貫禄じゅうぶん……





ビントロング属　*Arctistis*

ビントロング　*Arctistis binturong*

ビントロングは、ジャコウネコ科のなかでは大型であって、食肉目の哺乳(ほにゅう)類ではあるが実際は雑食性である。全長は[illegible]センチないし180センチに達するが、半分は尾である。胴体はがんじょうで、小さくとがった口先をもつ丸い頭部、そして、じょうぶな足をもっている。

足には5本の指があり、いくらか出し入れのできる強いかぎづめで武装している。からだは、長い密生した、こわいちぢれ毛でおおわれている。短くてまるい耳にはそれぞれ、2つのふさ毛がある。口先には白いりっぱなひげがはえている。全体につやのない黒い色をしているが、頭部では灰色っぽく、四肢としっぽでは青みがかっている。瞳はまったくの灰色で、幼獣は黄色みがかっている。

分布域は、ボルネオ、ジャワ、スマトラ、マレー半島、ビルマのテナセリム地方、アンダマン島とタイの間のクラ地峡までで、ビスマス列島、メルギー列島をもふくむ。インドのアッサム地方、タイにおよんでいる。しかし、これらの地域でも、生息数はわずかだ。

小型の哺乳類、鳥類、魚類、ミミズや昆虫(こんちゅう)を食べるが、どちらかというと、植物性のえさが好きである。

ビントロングは、木の上で生活する夜行性の動物で、のそりのそりと移動する。木に登るときには尾を使う。また尾を完全に枝に巻きつけ、先を枝に結びつけてつり下がり、長時間この姿勢でいることがある。〔注7〕

いちばん発達している感覚は、嗅覚(きゅうかく)と触覚で、ひげを触覚器官として使っている。

注7　ビントロング　別名クマネコ
ものをつかむことのできる長い尾は、90センチもあり
しっかり巻きつくことができる。
これは旧大陸の動物では珍しい特徴。
夜行性の樹上生活者で、性質は臆病である。

PHILIP WAYRE NHP AGENCY

日本で唯一のジャコウネコ科動物

――ハクビシン――

朝日　稔



ハクビシン（雄）　体長は50～60センチ，尾長40センチ。その特徴は，白いすじが顔の中心にあることである。目は丸くとびだし，鼻鏡は紫色。短い体毛は，薄茶色で，頭部と四肢の先，尾部は黒い。
女子栄養大学教養部動物学研究室で飼育中　（撮影　朝日新聞出版写真部　1971年5月）

ハクビシン，漢字では白鼻芯と書く。名まえのとおり，鼻すじの中心が白いのが特徴である。ジャコウネコ科の動物で，ヤシジャコウネコに近い。学名は *Paguma larvata* という。南はスマトラ，ボルネオ，マレーから，北は中国中部，台湾，日本にまで分布している。習性のくわしいことは，よくわかっていない。

この動物が日本で話題となったのは，1952年以後のことである。この年に静岡県で数頭が捕獲され，ミカンの害獣と考えられてから，日本各地からの報告が次々に集まってきた。

最初の確実な捕獲記録は，1943（昭和18）年静岡県西部のことであるが，その後，東北地方の宮城・福島，中部地方の長野・山梨・静岡，四国地方の徳島・愛媛・高知の各県でも捕獲され，1966年には全国で245頭も捕獲された。

移入種か在来種か

静岡県では，かつて浜名湖付近でこの動物を飼育していたという話があり，宮城県石巻市では，1944年に飼育中のハクビシンが逃げたことが確認されている。このような点から，日本にいるハクビシンは「戦前あるいは戦時中に，飼育されていたものが逃亡して，野生状態で繁殖したもの」と考える学者が多い。

この説の根拠としては，まず，日本における分布が不連続であること，しかもそれぞれの分布域で，逃亡したと思われる歴史があることがあげられる。また，静岡県産と愛媛県産とでは，毛皮の模様が少し違っているのは，それぞれが独立の集団であることを示している。さらに，中国や台湾にもっとも近い，九州地方に未発見であることもあげられる。これらは，ハクビシンが日本古来の動物ではなく，帰化動物であることを示している。

にもかかわらず，一方では「日本古来の動物である」という主張もある。

分布の不連続性についていえば，不連続なのはハクビシンに限らず，他の哺乳類にも例はある。ましてこの動物は，外見上はアナグマに似ていて，たいして有用性もないから，ハンターが射殺しても報告はアナグマとされる例が多いと考えられる。分布域のうち，静岡県と愛媛県はミカン生産の中心地であり，そこではハクビシンは害獣として特殊な関心をもたれているので，捕獲数の統計上分布の中心となっているともいえよう。

静岡と愛媛の毛皮の模様差にしても，亜種差を生じてもよいほどの地理的距離にある。他の哺乳類，たとえばシカの場合でも，両県産のものは明らかに違っている。

九州における未確認にしても，たとえばツキノワグマのように，九州でのみ絶滅しつつある（あるいはすでに絶滅してしまった）哺乳類もある以上，ハクビシンだけを問題にすることはできない。

さらに，いくつかの古文書に《雷獣》または《霊猫》という名で，ハクビシンと思われる動物の記述があることは，非常に興味がある。小原秀雄氏は，明和8（1771）年に，甲州天目山でとれた奇獣が「類聚名物考」の記載および図から判断すると，ハクビシンであろうと指摘している。

また古屋義男氏の教示によると，天保年間（1830年代）に発行された「甲子夜話」に，日向の山中にハクビシンと思われる，香気の強い動物がいることが記載されているという。これは，著者の松浦静山が九州平戸の藩主であることから，かなり信頼できるであろう。すると，以前には九州にもいたことになる。明治以降の文献にも，ハクビシンについての記載がかなりあるようである。

ハクビシン移入説に反対する，もう1つの論拠は，この動物が移入するだけの有用性をもたないことである。おもに果実食のため，ネズミや毒ヘビの駆除にはほとんど役にたたない。また香料採取にも，毛皮獣としても，価値はない。そうすると，ほぼ同じニッチェ（生態学的地位）を占めるテンやアナグマを押しのけ

→ ＊

――カラーページ注――

〔注1〕　**味覚器官**　味覚とは，口のなかでの化学物質に対する感覚をさしている。舌の表面に分布している《味のつぼみ（味蕾）》と呼ばれる器官が，その受容器である。

この器官は舌だけでなく，ほおの内側にも，魚類では口の周辺から体表面にも，分布している。いくつかの細胞が，タマネギの切り口のように組み合って，花のつぼみに似た形になっているので，この名がある。

〔注2〕　**肛門腺，香腺**　哺乳類の特徴として，皮膚に汗腺や皮脂腺をもつことがある。これらの腺の変形として，香腺（または臭腺）と呼ばれる，強いにおいをもつ分泌腺がある。これはその位置によって，肛門腺，尾下腺，蹠間腺，眼下腺などとも名づけられている。人間の腋下腺（えきかせん）も，その1つといえよう。

これらの腺のなかには，分泌物をいったん保留する腺嚢（香嚢）がつくられているものもある。分泌物のにおいをもつ効果としては，異性への刺激，テリトリーの宣言，攻撃のための武器など，いろいろの例が知られている。またジャコウネコをはじめいくつかの動物の香腺分泌物は，香料原料として採取されるが，その詳細は23号でふれる。

〔注3〕　**雌雄同体**　雌雄同体と呼ばれる動物には，いくつかのタイプがあるが，hermaphroditism と名づけられているのは，同一個体に雌の性質と雄の性質の両方が見られるものをいう。もともと陰核と陰茎とは発生上相同器官であり，胎児あるいは幼獣では外見上区別がむずかしい。ハイエナでは成体になっても，その傾向が残っている。

なお，hermaphrodite ということばは，ギリシャ神話のなかに，Hermes（ローマ名 Mercury）と Aphrodite（同 Venus）のあいだに生まれた子どもが両性を示したという話があることによる。

〔注4〕　**指行性と蹠行性**　体重を前後の足のどの部分までかけて移動するかということは，その哺乳類の行動力にも関係する問題である。人間の足のように《かかと》まで地面につけて歩くタイプを蹠行性といい，クマなどがその例だ。

これに対し，食肉目の大多数に見られるように，指節骨の部分までしか地面につけないのを指行性という。このタイプでは中手（足）骨から内側の部分は毛でおおわれている。その中間のものは半蹠行性と呼ばれ，中手（足）骨付近まで地面につける。

また，ウマやシカのように指骨の先端のみで立っているのは，蹄行性と呼ばれる。一般に接地面積が広いほど安定はよいが，走るのはおそい。

〔注5〕　**ジャコウネコの爬行**　ジャコウネコ科で最小のものは，アフリカのチビマングース *Helogale parvula* であるが，この種が完全に「ヘビのように」腹部を地面につけて爬行するという証拠はない。ただ足が短く，からだはきわめて細長いので，「ヘビのように」小さな穴にでもはいりこめるし，からだをくねらせて歩くと，あたかも爬行しているように見える点は，本文のエジプトマングースの記事と同じである。

〔注6〕　**マングースと毒ヘビ**　マングースはネコやイタチのように，ネズミ駆除に利用されているが，毒ヘビの駆除に対しても有効である。1870年に西インド諸島へ野ネズミの駆除のために移入されたのが，天敵利用の移入の最初とされている。

日本では，明治43（1910）年に渡瀬庄三郎博士らの指導で，インドからハイイロマングースをハブ駆除のために沖縄本島と渡名喜島へ移入している。この両島では，マングースがよく定着し，ハブ駆除に効果をあげているといわれている。奄美大島へも移入されているが，じゅうぶんな効果がないようだ。むしろ，マングースとハブとの決闘が，観光用のショーとして演出されている。

〔注7〕　**巻きつくことのできる尾**　樹上性の哺乳類のなかには，長い尾を枝や幹に巻きつかせて，からだをささえることのできるものがある。もっとも発達しているのはクモザルで，「5本めの手」のようになっているが，ジャコウネコ科のビントロングの尾も，先端が巻きつく力をもっている。そのほか食肉目では，アライグマ科のキンカジューが，完全に巻きつけられる尾をもつ。■

（朝日　稔）

ヒグマと2人のイノシシ 20

ミルクと怪鳥音



畑　正憲



時には甘えて，指をしゃぶることもあったが……

弟が鼻を咬まれた。それも見事な深手である。鼻の両脇に犬歯の跡が残って片仮名のハの字になった。

そのようすは僕も見ていた。24時間同じ部屋でつきあうことを決めていたので，いつかは眠るしかなかったが，弟がまどろんだ時，どんべえが近寄っていって弟の唇を舐めた。

そのままじっとしていれば良かったのだろうが，弟は夢うつつで顔をそむけた。その瞬間，どんべえが腹を立てて鼻にとびついたのである。

僕は座ったままその一部始終を見ていたのだが，こちらも相当に参っていたので，対策を施す閑がなかった。

弟は鼻を押えてぼやいた。

「痛えや。軟骨を食い切られるのじゃないかとうろたえたぞ」

「痛かったろう。2人で起きていても無駄だ。別の部屋で寝てくれよ」

「大丈夫。そのうち，おれと一緒に寝るようになるさ」

弟は意地を張った。だが，鼻への攻撃はこたえたらしく，

「かなわんなあ。あの声を聞くとぞっとするよ。ク，ク，ク……という鳥のなくような声。鼻を咬まれたのは，あの声の直後だった」

それには僕も気づいていた。ハナコの檻の側で，子グマの誕生を確認したのもその声だった。間見谷さんは，

「ほれ，子グマが元気に乳を吸ってる」

と説明してくれたものだ。

僕はそう信じていたし，前にその声を紹介した憶えがある。しかし，乳を吸うにしては不思議な声だ。短い断続音で，他の天体からの信号のような神秘的な趣がある。

乳を吸うのなら，ピチャピチャとか，ゴクゴクとか，もっと肉感的な音がしていいはずである。それに，寝ていて声をだすのは不自然ではないか。

それから，声にしぼって観察を続けた。すると，十中八九，これから目を醒ますという時に，あの怪鳥のなき声を発することがわかった。しかも，そのなき声がそのままリズミカルなわめきにとって代わったりした。

そういえば，きげんよく遊んでいるどんべえが，突然わめき始めることはなかった。必ず，ひと眠りした後で，まるで性格が変わったかのように，わめきながら部屋をのし歩いた。

観察を続けるうちに，僕たちが仮りに名づけた「怪鳥音」は，乳を吸う音ではなく，乳を捜す音だという結論を得た。

目醒めが近くなると，まず子グマの首筋の辺りが震え始める。そして，その震えはすぐさま頬を伝わって口へ届き，唇がわなわな動き，子グマは目を開ける。それから腹ばいになって，鼻面で蒲団を押しつつ前進する。

これは明らかに乳を捜す動作である。僕のノートには，上川でのスケッチがたくさんあるが，指しゃぶりが激しい際にも，この音がしたことが記録されている。山のクマの子，ハナコの子，4頭から全部記録されてもいた。

目が醒める，乳を捜す，母がいない—

目をさましたどんべえは，母親の乳を求めるように，くちびるを寄せてきた



＊ ————→

て，増殖していけるだけの個体数を，わざわざ移入する必要はないといえよう。

まして，少数の個体が逃亡して増殖できても，やがては近親交配の影響で滅亡すると考えるほうが，より妥当である。

果実を食い荒らす

移入種か在来種かという問題の解決には，各地のハクビシンの毛皮のみでなく骨学的研究をもふくめた，分類学的な検討が，かなり有力な答えを出すであろう。もし各地の集団がそれぞれ別に帰化したのであれば，その移出地はさまざまなので，日本での系統的な地理変異は見られないであろうから。

その由来はともあれ，ハクビシンの生活にはなかなか興味深いものがある。古屋義男氏の報告では，巣穴は川べ，あるいは山のすそにあり，自然にできた穴やアナグマの穴を利用することもある。夏と冬とでは行動地域が異なり，暑いときには山にはいりこんで，ミカンが熟するころおりてくる。

静岡県ではミカンの木に登って実を食べるが，愛媛県ではむしろミカンの貯蔵所へもぐりこむことが多い。ミカンのほかイチジクを食い荒らした例もあり，スイカ畑を荒らしたこともある。ネズミ，カニ，昆虫も食べる。飼育するとよくなれ，ほとんどなんでも食べるそうである。■

—となれば，不安になって，わめきちらしても当然である。だとしたら，僕自身が母親になるしかないではないか。

昔アイヌは，冬眠中のクマを撃ち，歯が生えていない子グマを得た際には，子持ちの女が片方の乳を与えて育てたという。しかし僕には，ミルクが出る乳はない。また，もしあっても，食いちぎられるおそれがある。

そこで僕は，ミルクを側に置いてどんべえの目醒めを待った。

と，予想たがわず，怪鳥音を伴う発作が訪れた。火をつくるため，原始人が，木と木をこすり合わせているようだ。

——さあ，今だ。

僕はミルクを含んで，どんべえの口に押し当てた。どうか咬んでくれないようにと心の中でいのりながら。

——しめた。うまいぞ。

僕は心の中で快哉を叫んだ。口が占領されていなければ，大声でばんざいを三唱したい位だった。

どんべえが僕の舌を吸い始めたのである。特徴のある口を丸めて，やさしく，力強く……。

しかも彼女の手は，やわらかく僕の肩にかけられていた。その爪が痛くないのである。力がぬけ，まるで爪を収めたネコの手の如く心地よい。

僕はミルクを吸わせ終わると，すばやく舌を引き抜いた。舌を噛み切られたのじゃこちらの命にかかわってくる。

予想は適中していた。この発見以後，僕たちは二度と怪鳥音に悩まされることがなくなったのである。

と同時に，乳を吸ったり，ものを食べたりする際に，子グマがおとなしくなり，まったく意のままになることもわかった。山で撃たれたヒグマの乳首とその周辺に傷がなかったことを思い出し，餌で友だちになる重要さを僕は思った。

哺乳動物は人間の原形でもある。まず乳を通して会話が始まるのである。

それはわかる。でも，あの怪鳥音を発する状態になると，どんなにミルクを与えても欲しがらないのはどういうことだったろうか。ミルク即親なら，ミルクの香を嗅いだと同時に発作が収まってもいいではないか。

他に意味もあろうが，ミルク即親ではないことを指しているのだろう。親というのは，体温や毛の感触や匂いや大きさ……すべてのものがまとまったイメージであろう。

しかも，目が醒める，乳を捜す，母がいないということで始まる発作は，生理的な単純な反射作用にまでなっているのではなかろうか。ある条件が満たされねば，決してやまないのである。

これは意外と大切なことかもしれない。山で，保護してくれる母がいない際に，怪鳥音を発する発作が起こるとすれば，耳のいい母グマは，子グマの居場所をすぐさま聞き当てるに違いない。

野生動物にとっては，稚い生命を保つために，是非とも必要な発作だと言えるだろう。

それからのどんべえの進歩にはめざましいものがあった。口の方は相変わらず鉄のスパナであったが，決して人に爪をかけなくなった。興奮している時でも，爪による傷を受けることはなくなった。後は，口による打撃を，できるだけ早い機会に人に与えないようにすることだ。

そのためには，人の皮膚を，完全に憶えさせ，間違っても咬まないようにしなければ同居はできぬ。といって，どうしたらよいのか，僕には経験がなかった。咬ませては鼻をはじく，その方法しか知らないのである。

部屋の中では，点々と血がにじんでいるだけに見えたが，陽の光の下で点検すると，僕と弟の両手は，青くはれて，ふた目と見られぬみすぼらしさであった。■

鳥獣むかしばなし 1

狐とかわうそ

再話　稲田和子

え　赤羽末吉

雪がボッボッボッボッ降りかかる寒い日になあ，山から狐が出て来ると，かわうそにひょっこり出会ったと。

「かわうそどん，かわうそどん。なんぞこのごろごちそうがあるかえ」

「なんにもあらせんわいな，この寒いのに。まあ珍しいこともないが，魚ならなんぼでもあるぜ。塩をしたのもあるし，みそにつけたのもある。たいたのもあるけ，欲しけりゃ家に食べに来なはれ」

「そりゃありがたい」と狐は大喜びでかわうその所へやって来て，台所へ入りこむと，

「うん，こりゃうまい。こいつはもっとうまいぞ」

と言い言い，足るだけ食った。

「なら，今度はおれがごちそうするけえ，あさっての晩ごろ来てごせ。山のものでも取っておくわい」

そう言って，鼻をふくらませて帰っていった。

狐は山をさがしまわって，きじの鳥をくわえてもどった。そいつを家の中に吊って眺めておると，欲しくて欲しくてたまらん。待つということができんで，とうとうひとりで食ってしまっただって。

さて，約束の晩にかわうそが来てみると，狐はあおむけに寝て，目ん玉も動かさずに，

「おれはいま，天の神さまに引きずられて動かれんだけ，まあ明日来てごせ」

ごちそうどころじゃない。そう言ってかわうそを追い帰したんだと。あくる日，狐は山を走りまわって，山兎をやっとつかまえて来た。しばらくの間は，そいつを台所に吊っておったが，見ておるうちに欲しくなって，よだれがとまらんようになったので，引きずりおろして食ってしまった。

晩になると，かわうそはいそいそと狐の家にやってきた。

「狐どん，狐どん。きょうこそはごちそうよばれに来たぞな」

声をかけたが，なんの返事もない。家の中は，シーンとして静かなもんだ。入ってみると，狐はうつぶしてじっと寝ておる。

「おい，狐どん，どげした」

「おれは今夜，地の神さまに引きずられて動けんけ，こげして寝とるだぜ。すまんが日延べしてごせ」

「そうか，わかった」と言ったものの，かわうそにしてみれば腹が立ってならん。よし，狐どんがだますなら，こっちもだましてやれ，と思ったから，

「狐どん，狐どん。魚のとり方を教えてやるけえ，動けるようになったら，お前取りに行ってみいや」

「うん，教えてごせ」

「わけはないことだがな。いかにも今夜は寒いという晩に池へ行ってなあ，お前の尻尾を水の中につけといてみなはれ。そうしょうもんなら，それだけ立派な尻尾のことだ。池ん中の魚がいっぱい寄って来て，大きいふなも小さいふなもくいつくけえ，その時尻尾を持ち上げて帰りゃあええ」

と，うそを言うて聞かせたと。狐は本気にして，じっと待っておった。そのうちにほんにきょうばっかりは寒くてたまらん，体の芯まで冷えるという日があったので，夜になるのを待って，狐は楽しんで出かけたと。

池のふちにしゃがんで，尻尾をつっこんでおれば寒うてたまらんけど，まあたんと食いついてもらおうと欲を出して，がまんしていた。時々ブリブリッと尻尾を振ってみるのだが，夜がふけるにつれて重たくなってくる。もう少しと思っておるうちに，東の空が白んできた。さて，もう尻尾を持ちあげようとするけれども，池の水に凍りついているから，なんぼ力を入れたってあがらない。

小ぶなは離せ，大ぶなよ来い
小ぶなは離せ，大ぶなよ来い

狐は勝手なことを唱えておったが，さっぱりききめがない。狐は鳴きながら，

大ぶなも小ぶなも，みな逃げろ
大ぶなも小ぶなも，みな逃げろ

と言っておるうちに，村の早起きのものに見つかってしまった。「ああ，あんなところに狐がおるわい」というわけで，とうとう人間に取られただって。

むかしこっぽり。■

（鳥取地方のはなし）



海中動物の生活

写真と文　館石　昭

5　サンゴの敵，オニヒトデ

エゾサンゴを食い荒らすオニヒトデ　水深５メートル　沖縄にて



サンゴを食い荒らして，美しい海中景観をだいなしにしてしまうというので大問題になっているのが，このオニヒトデである。オニヒトデは，木にたとえれば葉のような，サンゴのポリプをきれいに食いつくしてしまう。これに食われたサンゴは文字どおり白骨化し，枯れ木のようになる。

学者でないわたしにはよくわからないが，海のなかでも自然界のバランスがくずれたときに，ある種の生物だけが異常発生することがある。20年もむかしに，東京湾にアカヒトデが異常発生し，漁業に深刻な影響を与えたことがあったが，その対策が見つからないままに時が過ぎて，気がついてみたら平常の数にもどっていた。

オニヒトデの天敵は，ホラガイであると聞いているが，もしそうなら，現在沖縄あたりで猛威をふるっていられるのは，シェル・コレクションのあおりで，海中のホラガイが激減したためではないだろうか。

もう１つの天敵は，直径30～50センチにもなるオニヒトデとは比較にならない，３センチほどのエビの類である。一見すると小さなかわいいエビなのだが，これが３～５匹の共同作戦でオニヒトデの下にもぐりこみ，１時間以上もかけてひっくり返すのである。10倍も大きなオニヒトデをヨイショ，ヨイショとやるさまは，なんともこっけいである。ひっくり返すと上に乗り，まん中の弱い部分である口のあたりを，はさみで切りとって食べるのだが，こうなるとさしものオニヒトデも，哀れ小さなエビのえさになって終わりである。

オニヒトデの激増は，オーストラリアで問題になりだし，徐々に北上してきて，今では四国の南岸にまで及んでいる。各国で頭を悩ましているが，決定策がないのが実状である。■（水中写真家）

裏表紙説明

ワヌケヤッコ　チョウチョウウオ科キンチャクダイ亜科の全長40センチ以上にもなる大きな魚である。

インド，セイロン，インドネシア，マレーシア，ニューギニア西部などの珊瑚礁にすんでいる。マレー語で ikan babi（ブタまたはイノシシのような魚の意）とか ayam hutan（野鶏のけづめの意）などと呼ばれているが，これは，この魚の前鰓蓋骨（ぜんさいがいこつ）にある１本のとげや，細かい歯のたくさんある特異な口の形に着目して命名したもの。

マラヤの魚市場ではキンチャクダイ類の魚がよくみられるが，このワヌケヤッコはそのなかでも，もっともふつうにみられる魚である。しかし，あまりにも鮮麗なので食用魚としてよりは，鑑賞魚として有名である。

昼間は珊瑚礁のあいだにいて小魚や珊瑚などを食べているが，すばしこくて捕えるのはむずかしい。やみ夜に，岩の割れめでじっとしているところにライトをあてて，目がくらんだところをすくい取るという。■

（農林省東海区水産研　阿部宗明）

Ph. Klages-Atlas Photo

海辺の生物の採集と飼育　1



杉浦　宏　（上野動物園水族館飼育係長）

夏がくると，海に出かける機会が多くなります。そんなとき，子どもたちといっしょになってカニやイソギンチャクなどを採集したり，小さな魚を見つけて大騒ぎしながら捕えたりして，楽しいひとときを過ごすでしょう。こうした動物たちを，もし家で飼えたらばいいな，と思う人がたくさんいます。本号と次号の２回にわたって，海辺の生物の飼育について，たくさんの人たちからのご質問にお答えすることにします。

〈採集にあたって〉　海辺には，数多くの種類の動物が生活を営んでいます。岩の多い磯，砂浜，潮のひいたあとにできるタイドプール，こうした海辺には，それぞれの環境にマッチした動物がいます。採集する前に，個々の動物がどんな環境にすんでいるのかを観察しましょう。

どんな動物でも，人間の手にかかれば捕えられてしまいます。岩のすきまに昼間はもぐりこんでいるウニなども，夜になるとえさを求めてはいだしてきます。しかし，いくらたくさんの動物をつかまえられるからといって，必要以上の量を採集することは，絶対にやめなければいけません。家に用意した水槽の大きさを考えて，飼育できるだけの種類，数を採集することにしましょう。海水の汚染が叫ばれているなかで，人による害は，少しでも少なくするように，ひとりひとりが心がけることが必要です。

〈運搬について〉　目ざす動物を，からだに傷をつけることなく採集したあと，帰るまでの間は，いけすなどを使って元気な状態を保ってやらなければなりません。ビニール製のざるを２つ合わせて，その中に動物を入れ，潮だまりや海のなかに入れておくとよいでしょう。

輸送には，ビニールバケツのふた付きのものを使い，きれいな海水をくみ，その中に採集した動物を入れて持ち帰ります。欲ばって小さなバケツにたくさんの動物を入れると，途中で全部死んでしまうことがあります。

携帯用の酸素ボンベを持っていき，ビニール袋に海水を少なめに入れ，中の空気を出し酸素を充満させて，しっかりと口を締めておけば，３時間以上平気です。温度があまり高くなると，そのために死ぬこともあるので，なるべく短い時間に，日に当たらないようにしながら運搬するようにしましょう。

〈飼育方法について〉　淡水の生物と違って，水を水槽に入れて，空気を送りこむだけでは飼えないのが海水動物なのです。そこで，海の生物を飼うときには，海水を循環させなければなりません。濾過の方法には，ポンプを使う方法と，エアーポンプを使うエアーリフトによる方法とがあります。

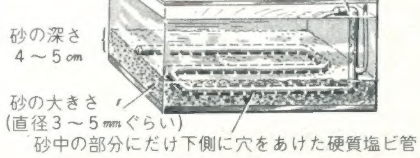
１つの例を示すと，水槽の底に敷いてある砂を濾過砂として，砂のなかに埋めてあるパイプを通って，濾過された海水がエアーリフトによって水面まで上がってきます（図参照）。こうして絶えず海水を循環・濾過させることによって，生物が排泄したアンモニア態窒素を，無害の硝酸態窒素に変えてしまうのです。濾過砂には，こうした化学作用を促進させるバクテリアが一面に繁殖していて，海水を浄化するのです。

なぜ，海水を循環・濾過しなければならないのかということは，これでおわかりいただけたと思います。ですから，海水はしじゅう循環させる必要があるのです。

海水は，できれば天然の海水を使うのがよいのですが，近ごろ，人工海水でもかなり質のよいものが売られています。信用のある店で，人工海水の素を買ってきてつくってもかまいません。海にいくとき，ポリビンやビニール袋を用意していって，きれいな海水をくんできておくとよいでしょう。

水温は，28 ℃～30 ℃ぐらいが上限ですから，風通しのよいところに水槽を置くようにして，水温計を用意し，温度が上昇しないように注意してください。■

飼育箱の１例

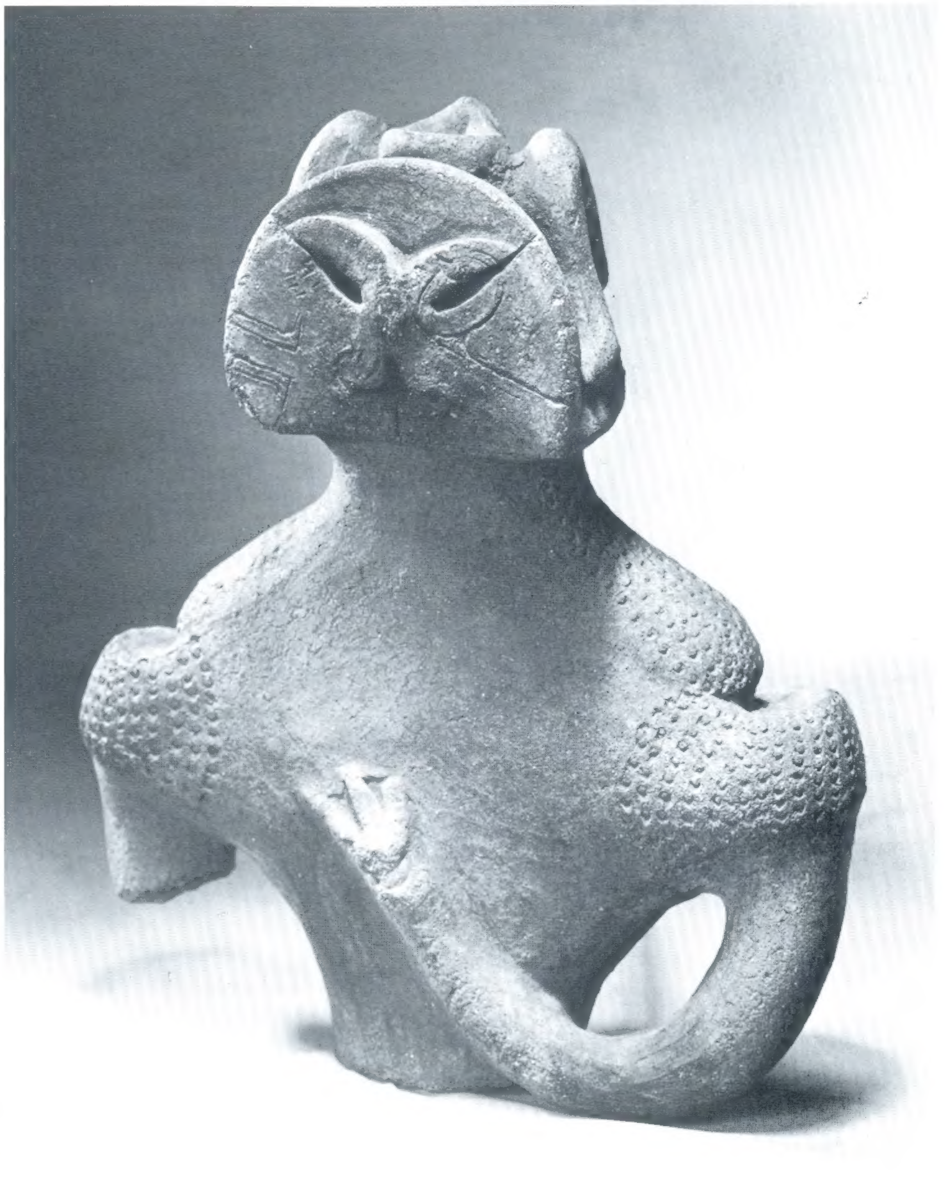


▶本号，『ネコの行動学』（日高敏隆）は休載します。

ギャラリー

猫のような土偶

縄文時代の土偶には、私たちの理解のおよびもつかない不思議な表現をもったものが多い。それは、原始的な信仰や呪術のための偶像や呪物として作られたからで、超現実的、神秘的な性格と表現を強調することが、土偶を作る場合のもっとも重要な意図であったと考えられる。この土偶は、そのなかでもとりわけ怪奇な姿である。猫と呼ばれる通り、顔はなるほど猫に似ているけれども、体は人間だ。下半身は欠けているが、多分、細い胴に張った腰が続き、太く短い足をふんばって直立するように作られていたのだろう。まなじりが切れ、つり上がった恐ろしい眼。上唇の裂けた口。傷あとのような刺文や刻線をつけた半円形の顔面。頭は髪を束ねてゆい、肩はなで肩で、腕の付根は深くめりこんでいる。毛をあらわすのか、そのあたりにはぶつぶつと文様が押しつけてある。胸の前にあげた曲がった手は3本指で、不気味な妖気が顔からも体からも立ちこめてくる。狩猟生活における呪術の偶像にふさわしい、みごとな魔性の表現と言ってよかろう。この像を作った縄文人は、現代なら異常な感覚と表現力を持つ彫刻家として、注目を集めるにちがいない。とくに感嘆すべきは、けものの顔つきや体つきの特徴をとらえて、それを人間のかたちに巧みに表現しているという点だけではなく、けものと人間とが渾然と一体になった不可思議な存在の、そのなまなましい怪奇性を、ひとつのたしかな性格としてはっきり造型し得ていることがある。今から4000～5000年以前の中部山岳地帯には、現実にこういう姿をした怪物が跳梁していたのではなかったか、とすら信じられてくる気がするではないか。■　（水尾比呂志）



縄文中期
高さ　25.6センチ
山梨県東八代郡
黒駒出土
東京国立博物館蔵

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻22号　昭和46年8月8日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ワヌケヤッコ　　説明 30ページ